マージナル・マンとしての外国人生徒
―島根県在住高校生の場合―

宮　澤　理　恵*

Foreign Students as Marginal Man:
A Case Study of High School Students in Shimane Prefecture

MIYAZAWA Rie

キーワード：マージナル・マン、場所、架け橋、移動、アイデンティティ

1．はじめに

多文化共生という言葉が使われるようになって久しい。特に 1990 年と 2019 年の出入国管理法改正によって、労働者として多くの外国人が来日するようになると、受け入れ企業や地域住民はかれらの日本生活をサポートするために多岐にわたる支援活動を行ってきた。

島根県ではここ数年、出雲市の電子部品製造工場が外国人を積極的に採用していることから、ブラジルを中心に外国人住民が増加している。出雲市の調査（2019 年）では、かれらのうち約 3 割が子どもと一緒に生活していることが分かっている。これまでにも市は、家族で移住してきた外国人に対して早い段階で支援を行ってきた。例えば、学齢期にあたる日本語が十分でない子どもたちに対しては、「取り出し指導」と呼ばれる別教室での一人一人に合わせた日本語指導を実施している。それに伴った教職員指導にも力を入れ、子どもたちへの万全な学習支援に市と学校が一丸となって取り組んでいる。

筆者は、島根県在住の外国人高校生のインタビュー調査から、外国人生徒の居場所について考察した（宮澤、2020）。そこでは、外国人児童生徒の居場所が教室や日本語教室といった特定の場所で議論されていることを指摘し、それら以外の居場所の可能性を検討した。そのインタビューから、ブータン人と日本人の両親を持つ彼女が、二国間交流を通して積極的に間に立つことによって、自らの居場所を見出していく事例を確認した。彼女は、集団と集団の間に立つという自らの状態を「架け橋」と意味づけ、日本の隠岐の島という地で奮闘し、自らの生活を切り開いていった。そこで彼女は、友人たちやブータンと日本といったそれぞれの間に自らの居場所を創

*島根大学大学院人文社会科学研究科修士課程

出し、外国である日本で生きがいを持って暮らしている（宮澤、2020）。

インタビュー中、印象的だったのは、不慣れな場所で暮らす大変さを語る彼女から、日々を必死に生き抜こうとする力強さが認められたことであった。この生き延びていく強さは、彼女の居場所の創出と無関係ではないだろう。そこで今回は、集団間を架橋していくことで創出される居場所にこの生き抜く力の視点を加え、移民第二世代の子どもの居場所を再考する。

2. 先行研究と課題

2.1 居場所研究の変遷と外国人の居場所

日本における居場所研究は、不登校問題に不随して起こる。1980 年代前後から学校に行けない児童・生徒たちが問題視されはじめると、文部省（現文部科学省）は 80 年代後半にその現象を「登校拒否」とした。そして登校拒否を防ぐには、「学校が児童・生徒にとって『心の居場所』」になるべきだとし、居場所の重要性を認めた（田中、1992）。そして 90 年代には女性の居場所（金谷、1990）、2000 年代には高齢者の居場所（佐野、2003）、ひとりの居場所（阿部、2011）など、世相に反映された様々な居場所論が展開されていく。このように居場所の必要性が強調されるのは、総じて集団の中でマイノリティとして扱われる人々に対してである。

日本に住む外国人も同様にマイノリティと見なせるだろう。島根県は、県内の外国人住民に対してかれらのニーズや意見を把握するため調査を実施した。その結果、かれらから「近所の人ともっと親しくしたい」「日本の習慣等をもっと教えてほしい」と地域住民や日本とのつながりを希望する声が多く聞かれた（島根県、2012）。「多文化共生のまち」を目指す出雲市はこのことを受け、「情報発信の多言語化と情報伝達手段の確保」や「日本語の習得と地域社会で共に暮らしていくための支援」などの施策を講じている。具体的には、市役所や行政窓口の多言語化はもとより、地元の病院や交通機関でも、かれらが安心して暮らせるようなサービスを提供している。このような事例は、日本各地で見られ、その研究も多くある。

しかし、外国人の子どもに関する議論、特にかれらの居場所をめぐっては、矢野泉が述べるように「居場所の中心的な当事者が、日本人の子ども・若者ばかりで、外国籍および外国に出自をもち民族的バックグランドを異にする子ども・若者を中心とした当事者主体の居場所づくりに関する研究論文は管見の限り、社会教育学において、これまでなかった」（矢野、2006：261）。そこに加えて、外国人児童生徒の居場所は、これまで学校や日本語教室に限定して検討されてきたことも指摘しておきたい。そうした議論には、かれらが一日の大半を過ごすのは「教室」であるため、自ずとそこが居場所になると見なす傾向がある。このため、外国人児童生徒への支援対策は、既存の場をより強く意識することを促されてしまっている。

2.2 居場所の定義と問題の所在

若者がどのような場を居場所と感じているのかを調査・報告した内閣府『平成 29 年版子供・若者白書』には、「ほっとできる、居心地の良い場」と「悩みを相談できるなど他者とのつながりの状態」の二つが居場所と定義されている（内閣府 2017）。ここで重要なのは、居場所はそれが場所であれ心理状態であれ、他者との関わりの中で形成されるも

のと理解されていることだ。また、島喜代子らは、他者との関係を軸に居場所を二つに分け、他者との関係から自由になる場を「個人的居場所」、他者との関係が自己確認につながる場を「社会的居場所」とし、「他者から認められたり、他者から離れ自分を取り戻したりして得られるような『自分を確認できる場所』」が居場所であると定義する(中島ほか、2007：95)。

他者との関係に加え、自然や事物との関係においても居場所は生まれるという指摘もある。萩原建次郎は、小・中学校、高校のクラスにある「自分の席」を事例に、席という小スペースであっても「私」と関係づけられ意味づけられていくとそこが「自分の居場所」になるという。そして「大学生になり居場所が見つけられず少し寂しい」というコメントを基に、居場所とは観念的な場所や客観的な物理空間ではなく、「具体的な他者・自然・事物との関係において生起する関係概念」だと述べる（萩原、2011：80 − 81)。以上を踏まえ、本研究における居場所の定義をしたい。居場所は特定の空間として存在するものではなく、他者や事物と関わる時間の中で創出されるものである。そして自己が世界との新しい関係に開かれていき、自己実現に取り組める心理的経験としての場を居場所と呼ぶ。

これまで外国人児童生徒の支援に関する検討は、学級や日本語教室などの教育現場を中心に議論されてきた。しかし、それはわれわれが日本の学校という集団の中で、外国人児童生徒をマイノリティとし、マイノリティには居場所が必要と思うからにほかならない。そしてわれわれは、かれらのための居場所づくりに取り組むため、かれらには居場所があると思いがちだ。しかし、上述の議論を踏まえるなら、これからは学校の外へと一歩抜け出た視点も必要なのではないだろうか。というのも、居場所が他の人や物との関係性から得られ、また複数に存在可能であるならば、学校内にだけ目を向けていては見つかりにくい。日本に来て間もない子どもたちは、われわれが用意した既存の支援活動や環境に、必ずしも居場所を見出せるとは限らないからだ。それでもかれらは、近くの公園に遊びに行ってみたり、地元スーパーで買い物をしてみたり、習い事を始めたりと、新しい環境に必死に適応しようとしている。外国人児童生徒の中には、来日前に一緒に遊んでいた友だちや家族が懐かしくなり、連絡を取って近況報告をしたり相談にのってもらうこともある。実際、かれらの持つ関係性は広範囲に多様に開かれているのだ。そこで本研究は、外国人児童生徒の複数集団を架橋するマージナル・マンとしての特性に着目する。特に、マージナルな存在であるかれらの「居場所」が、特定の場所ではなく、様々な場を架橋して作り出されるもの、つまりかれらの居場所は「ある」のではなく、ないところから常に「創出」されることを明らかにする。次章からは、実際のインタビュー調査を通し、外国人高校生がどんなところに居場所を見出しているのかを考察していく。

3. 調査の概要

ここでは、島根県各地に在住している移民第二世代の生徒たちに実施したインタビュー調査で得られた事例を取り上げる。この調査は、2019 年 8 月 ～ 2020 年 8 月にかけて、15 ～ 18 歳を対象に、自由面接方式で約一時間半～二時間行った。対象者を高校生、も

しくは高校へ通う学齢期とした。その理由は、義務教育の時期とは違い、就職や進学という将来選択を自己決定できる年齢にあるかれらからは、自らの状況に応じて居心地の良い場所を選び取っていく様子が顕著に見られると推測されるからだ。

1人目の女性Aさん[(1)]（15歳）は、ヨルダン人と日本人の両親を持ち、島根県で生まれ育ち、インタビュー時は松江市に住んでいた。彼女は、中学校の卒業式を数週間前に終えたばかりであり、希望する進学先が市内にあった。だが、親の都合により急遽ヨルダンに引っ越すことが決定した。

2人目の男性Bさん（17歳）は、両親が前述した出雲市の電子部品工場に勤務している。中学3年生の途中までブラジルで過ごしていたが、両親の仕事の都合で来日し、高校受験を経て、現在、松江市内の高校に通学している。

3人目の女性Cさん（18歳）は、前回の論文でも取り上げたブータン出身の高校生である。彼女は、ブータン人と日本人の両親を持ち、中学校を卒業するまで、ブータンに住んでいた。他の2人と違い、自ら希望して島根県の高校を受験し入学した。ブータンと日本との間に居場所を見出したCさんだったが、国籍選択にせまられ頭を悩ませていた。Cさんがその後どのような選択をしたのか、今回追調査を実施した。

4. 島根県在住の高校生の事例

4.1 ヨルダンにルーツを持つ高校生

島根で生まれ育ったAさんだが、「島根（日本）にもヨルダンにも居場所はない」とはっきりと述べていた。彼女は幼少時から外見の違いに苦労し、小学校で受けたいじめが原因で、学校の雰囲気が嫌になったと語る。環境を変えたいと強く希望し、率先して小学校とは学区の違う中学校を探し、自ら受験の手続きに出向き入学をはたす。ムスリム教徒であるAさんは、中学入学後からヒジャブを着て登校するようになる。

中学校にある既存の活動や役割に、居心地の良い場所は見つからなかったため、在学中はロボットコンテストに参加したり、生徒会長になって自ら中学校の変革に取り組んだりと積極的に行動する。それらの経験から彼女は、「何かを変えるために他人と議論し、新しい物を作り出していく」ことに楽しさを発見する。そこからAさんは、進路希望先に高等専門学校を選び、将来は仲間と「ものづくり」をしたいと決意する。しかし急遽ヨルダンへの引っ越しが決まり、現地の高校に通うこととなった。

Aさんの将来の夢は、ヨルダンでアラビア語を学び、それからアメリカの大学で医者とプログラミングの学位を取得し、アメリカで起業することだ。そして、英語とアラビア語で日本の漫才もしたいと笑いながら語った。日本に永住予定だった彼女は、生まれ育った場所に居場所が見出せず、自ら進んで学内の役職にも就き、納得できる場を開拓していこうとした。引っ越し直前ということもあり、インタビューの時点ではAさんに明確な居場所を確認することはできなかった。しかし、彼女は移動する先々で、自分に合った居場所を自ら努力して作り出そうとしていた。ヨルダン、日本、そして将来の夢であるアメリカをこれから架橋するであろうAさんは、英語やアラビア語を習得し、日本の漫才をする夢もあり、マージナルな存在としての片鱗が見られた。

4.2 ブラジル出身の高校生

Bさんは中学校3年生までブラジルで暮らしていた。住んでいた地域は治安が悪いため、保護者と一緒に登下校をしなければならない。それが高校終了まで続き、思春期や青年期をむかえる年齢になると、この登下校方法に反感を示す子どもも多いとBさんの父親は語る。

現在、Bさんは出雲市に住み、隣市の高校に通う。彼は毎日電車通学をしているが、日本では中学生以上になると登下校に保護者が付き添うことはない。彼はそれが「気に入っている」と話す。日本人にとって当たり前とも言える通学習慣は、彼にとっては、見知らぬ外国の土地で、自分自身の力で、目的地までたどりつき、さらに無事に家族のいる元の場所へ戻れるかを試す時間になっている。

つまり、ブラジルではむしろ反抗心さえ抱いていた「登下校」という時間が、今では自分一人で解決しなければならない挑戦となっているのだ。Bさんはそれを毎日繰り返すことで、日本で生活していく自信を深めた。登下校という家と高校の間に位置する移動時間は、マージナルな存在の彼には自己成長を確認できる特別な時間であると同時に、それが彼の中でのブラジルと日本を架橋する居場所にもなっている。

この独特な移動体験は、Bさんの将来選択にも少なからず影響を与えている。彼は高校卒業後、言語プログラミングを勉強したいと話す。カナダの大学へ進学を希望していたが、経済的理由で断念し、日本の専門学校か大学進学を望んでいる。進学後は在学中に、カナダ留学も挑戦したいそうだ。ブラジルにいる頃から培ってきた英語力をさらに伸ばし、ゲームプログラマーとして活躍する夢を持つ。ブラジル、日本、カナダやアメリカなど、就職できるならどこにでも行きたいとBさんは語っていた。彼の将来選択には、一つの場に留まらず移動していける動的な存在としてのマージナルな強みが活かされていると言えよう。

4.3 ブータン出身の高校生

Cさんはインタビュー中に何度も「架け橋」という言葉を使用していた。他の対象者と違い、彼女は自ら望んでブータンから島根の高校に入学した。それにも関わらず、日本での高校生活は慣れないことの連続で、高校1年生の前半は悩みを抱えながら生活していた。それを解消したきっかけが「ブータンと日本をつなぐ」活動だ。具体例として、以前自分が通っていたブータンの学校と、現在通っている島根の学校をビデオ電話で接続し、双方の国の間に立ち、相互理解を深めるための異文化交流を企画した。他にも日本の大学生と連携し、ブータンと隠岐郡をつなぐ活動にも取り組む。そのような経験を通じて「架け橋」の楽しさを実感した。Cさんは、ブータンでも日本でもない、二国間をつなぐこと、つまりマージナルな場所に、自分の居場所を作り出した。2019年にインタビューした際、彼女の悩みは国籍選択だった。国と国との間に居場所を見出したCさんにとって、どちらかを選ばなければならないというのは頭の痛い問題だ。Cさんの将来の夢は、キャビンアテンダントを経て国連職員になることだ。このような架橋的職業は、彼女が作り出した自らの居場所の延長にある。居場所の創出に対する自覚がCさんの将来の自己像を具体的かつ明確にしていく。

2020年の追調査では、彼女は地域課題解決型学習の成果を、シンガポールの大学生に向けプレゼンテーションする海外研修に参

加、そしてその活動をスーパーグローバルハイスクールが集う全国フォーラムにて英語で発表するなど、架け橋として活躍の場をいっそう広げていたことがわかった。

頭を悩ませていた国籍問題も、今では将来の夢であるユネスコや国連に就職できそうな大学が日本にあることから、日本を選択し、将来はブータンの文化を守りたいと熱く語ってくれた。国籍を日本にしたことで、一つの場所に落ち着いたかのように見える彼女だが、国籍選択はあくまで自分の夢を叶えるための手段である。大学に入学できたらフランスへ留学し、国連で使用されるフランス語を学びたいと早くも具体的な計画を立てている。

C さんがユネスコや国連スタッフを志望する理由は、急激に近代化するブータンを危惧し、その文化を守りたいからだ。この将来選択は、今まで日本やシンガポールの状況を学んできた知識を、ブータンで応用させたいという C さんの壮大な架け橋プロジェクトの一環と言える。そして国連職員として国と国との間に立ち、国際関係をより良いものにしていくことが、彼女の将来の目標である。

5. 考　　察

上述の外国人生徒たちは、それぞれ違う居場所を見出していた。共通点としては、いずれも複数の社会集団の間にいるマージナルな存在ということだ。そこで本節では、マージナル・マンとしての移民第二世代の居場所について考察していく。

「マージナル・マン」という概念は、ジンメルの「よそ者」概念を基に、R.E. パーク、S.V. ストーンクィスト、A. シュッツらによって議論が展開されてきた。「今日来て明日とどまる人―いわば滞在的放浪者」(ジンメル、1908 = 1999)、「2 つの世界に暮らしている。多かれ少なかれどちらの世界でも余所者」(パーク、1928 = 1999) というように、マージナル・マンの状況は、今日母国ではない国で暮らしている人々にも当てはまる。加えて、パークは、マージナル・マンは「より広い視野とするどい知性、より超然とした、合理的な視点に立つ人間になる」と積極的に評価した (パーク、1928 = 1999)。さらに、ストーンクィストは、「民主的リーダー」性や「文化的仲介者」としての活躍をマージナル・マンに認めているように、かれらには周縁にいるからこそ発揮できる力もある (Stonequist, 1937)。

このような観点から移民第二世代を捉えてみると、マージナル・マンの心的特性として指摘される「強い自己意識」や「不安定」が見られるものの、それを乗り越えるために A さんは中学の生徒会長として学校を変えようとし、また、C さんは文化交流を通してブータンと日本の架け橋になろうとする。その過程でそれぞれ自らの居場所を作り出そうとしている。つまり、居場所は、最初からあるもの (being) ではなく、A さんや C さんのように学校を変えるために生徒会活動する、ブータンと日本の架け橋になるといった何かをすること (doing) から生まれるものだと言えよう。特に、生まれた国である日本の学校で居場所がなく、様々な活動に没頭して居場所を探し続ける A さんの事例がそれを如実に物語っている。

青年期の居場所はアイデンティティ確立において重要である。中藤信哉によると、居場所が継続的に確保できることによって、自分が「いること」の連続性は保証され、連続性を持った者として存在できるという[(2)] (中

藤、2011)。つまり、人は連続的な居場所があることで、自分の存在の連続性も実感できるというのである。このように居場所とアイデンティティ確立の関連性については、いること (being) が前提で議論が進む。存在できなければ、居場所がないのは自明である。ただリスク社会や環境破壊が叫ばれる現代において、いること（being）さえも困難な状況にわれわれは直面している。そのただ中での居場所探しは、ますます複雑になっていく。今回の移民第二世代の事例から、居場所も自己の存在も作り出すこと (doing) により獲得されるという面にこそ、われわれは注視しなければならない。

例えば、A さんは在学中、その場その場の状況に応じて、自らが心地よいと思える環境を作り上げようとする。ロボットコンテストへの参加や生徒会長としての活躍は、学校の中でたえず居場所を見つけようとする A さんの気持ちの表れでもある。「何かを変えるために他人と議論し、新しい物を作り出していく」こと (doing) に楽しさを見出した A さんの言う「何か」とは、まさに既存のもの (being)、つまり学校システムといっても過言ではない。それを変えるために、自らを取り巻く友人や先輩、教師や家族らと話し合いながら、A さんは A さんならではの安心できる場所を創造していく。彼女は引越し先のヨルダンで、将来進学を希望するアメリカで、その時々に応じた自分に相応しい居場所を、繰り返し創造していく。そして、アラビア語や英語を学び、行く先々で日本の漫才をする夢を持つ。それは、ヨルダンと日本、そしてアメリカという国々の間にいるマージナルな存在としての A さんだからこそ創出できる夢である。

そのマージナルな動的特性は、B さんの居場所にも表れている。日本人にとって当たり前である登下校のあり方に、B さんは居場所を見出している。この事例からも居場所とは、何も固定されている場所のみならず、移動の中にも存在していると言える。J．アーリは、日常生活の中で行楽や徒歩、ドライブ、電話、飛行機などが明らかに重要であるにも関わらず、社会科学の中で目が向けられてこなかったことを指摘する。人々の日々の通勤、週に一度家族を訪ねる際に生じる移動、すなわち非規定的な時空間をアーリは、「中間空間」と呼んでいるが、B さんの居場所は、まさにこの中間空間に位置する（Urry 2007=2015)。B さんが登下校で創出した自分自身の居場所は、彼だけの私的活動領域である。そしてこの移動時間は、この先に待ち受けている彼の将来にも深く関わってくる。

アーリによれば、多くの人がより遠くへ、より高速で移動可能となったことは「モバイル化」した生活と呼ばれ、そうした生活を営む人、例えば若者であれば「『海外経験』を得るために地球の反対側にある国へと出かけるべきか、他国へ仕事を探しに行くべきか、パートナーや家族を犠牲にしてまで、さらなる教育や訓練を受けるべきなのかをその時々に応じて選択を迫られる」という（Urry, 2010 ＝ 2016：122)。B さんは日本の大学に入学し、交換留学さらに、将来はコンピュータープログラマーになりたいという夢がある。そして「就職できるなら日本以外の国でも構わない」と話す。移動に居場所の創出ないし自己創出の可能性を見出している。それはマージナルな存在である彼が、動的（モバイル）感覚を持っていると言える。「場」という一定空間に固定され留まっている定住社会に住む人とは異なった感覚である。

マージナル・マンは、かつていた場所と今

いる新しい場所のような二集団の間に立ち、独自のネットワークや回路を築き上げる動的な存在であり、それが強みとなる。さらに、かれらは移動などをきっかけに周囲の人や物とのつながり方が変わると、今ある場所の在り方も変えることができる力を秘めている。B さんは物理的な意味でも、比喩的な意味でも、移動を通じて自分の家（ブラジル）と高校（日本）を自らの意識内で架橋し、それが彼の自信にもつながっている。

居場所の創出にマージナル・マンとしての強みが顕著に表れている事例が C さんだ。彼女はブータンと日本の間に立ち、そこに居場所を見出している。しかし、「架け橋」が居場所になるという見解に対しては、疑問を提示する議論も見受けられる。

石﨑直一・依光正哲は、日本の大学に通う移民第二世代の進路選択に関するインタビュー調査を実施している。調査結果を基に日本社会における外国人受け入れ対策上の教育面の不備を指摘し、今後の課題を挙げる。そこで、「国と国との架け橋」という語り口を疑問視する。架け橋という考え方は、多文化教育の影響もあり、しばしば素晴らしいことだと語られる傾向にあるが、それは日本に根付いて生活していくという意識が希薄であることを示していると指摘する。さらに自分が常に外国人であることを強く意識し、日本社会に溶け込みにくいことを自覚し、傍観してしまっていると述べる (石﨑・依光、2003)。

だが果たして、動的な存在であるマージナルなかれらに、「日本に根付いて生活していくという意識」は即しているだろうか。C さんは、ブータンと日本のどちらかを選ぶのではなく、両方をつなぐことに居場所を見出している。このことから、定住社会で生活する者と、マージナルな存在とでは、居場所に対し異なった感覚を抱いていると言えよう。アーリは、文化もサービスもリスクも、さまざまな境界を横断することを「フローのシティズンシップ」と呼び、ナショナルなシティズンシップやアイデンティティを凌駕するものだと指摘する（Urry, 2007=2015）。これは、ブータンと日本の文化を横断すること、すなわち「二国間をつなぐ関係、つまり架け橋としての自己にアイデンティティ」を見出す C さんに当てはまる（宮澤、2020）。マージナル・マンの居場所がすでにあるもの (being) ではなく、すること（doing）によって獲得されるように、かれらのアイデンティティもまた国や地域にあるのではなく、そこを越えたつながりの中に獲得されていくのだ。

上野千鶴子は、「同一性」と訳されてきたアイデンティティに、石川准が「存在証明」という訳語を与えたことに注目し、アイデンティティという概念が「(統合された安定的な) アイデンティティを獲得するべきだ」という規範命題と結びつくとしている。その上で、アイデンティティを「存在証明」と訳すならば、「存在証明」への脅迫 obsession とも受け取れる。存在証明を脅迫的に求められるのは誰かと指摘する（上野、2005）。つまり、C さんや他の移民第二世代の若者たちが「国と国との架け橋」を夢見ることに対し、日本で生活していくという意識が希薄と言われる所以も「（統合された安定的な）居場所を獲得するべきだ」という規範命題が当てはまる。総務省の「多文化共生事例集」（2017）では、地域住民による支援活動が学校に代わる居場所として注目されている。ここで留意すべきは、マージナルな立場にあるかれらを日本で生活させていくために、安定的とされる集団

に取り込み、根付かせることがかれらの居場所の確保につながると思わないことだ。そうでなければ、学習の場に限定してかれらを根付かせようとしてきたこれまでの外国人生徒の居場所論を再演してしまうだろう。

これまで見てきたように、マージナルな存在であるかれらは、留まらせる固定的な「場」ではなく、動的な「場」を自ら作り出している。かれらは、境界領域に身をおくので、どの場所にも属せず、疎外感にさいなまれていると思われがちだ。そう思い込んでいるのはホスト国側の人間のほうである。少なくとも私がインタビューした生徒たちは、学校の内外、特定の国や地域を選び落ち着く様子は見られなかった。それよりも、自らの力で何とか世界を切り開き、自分の中で複数の文化や社会集団を架橋し、そこに自己の居場所を創出していることが確認できた。マージナルな存在であるかれらだからこそ持っている創造的な可能性を私たちは考慮すべきだ。

境界領域を生きるかれらの事例に鑑みると、これまでの外国人生徒に対する安心できる居場所づくりには再考の余地がある。前述の『平成 29 年版　子供・若者白書』の中で指摘されているように、かれらが築き上げてきた広い関係性からもこの問題を考察していくことが必要だ。なぜなら、外国人生徒たちが歩んでいる人生は、一人一人違ったものであり、個々人に応じて安心できる居場所も異なっているからだ。

このことについて、大学進学する移民第二世代の若者たちの研究をしている三浦綾希子は、「かれらの育ちの過程を考慮にいれた上での対応が求められる」（三浦、2020：201）と主張する。三浦は、移民第二世代における大学での日本語授業履修を取り上げ、履修の必要性はそれぞれの育ちの過程によって異なるので、国籍や在籍身分では一律に判断できないという。そして義務教育段階における移民の子どもへの対応については、かれら独自のニーズがあり、それに対応することは特別扱いではないという議論を取り上げ、大学においてもそれぞれの背景を考慮した「特別扱い」が必要であると述べる（三浦、2020）。もちろん、そこが大学という教育研究の場であっても「独自のニーズ」とは学習支援に留まるものではない。むしろ体験の幅も機会も増えていく大学であれば、独自のニーズも多種多様になるだろう。移民第二世代に対する支援は、まずかれら一人一人を理解していくことに始まり、そこから個人に即した対応を講じなければならないのだ。

6. まとめ

今回のインタビュー調査から、外国人生徒たちは、既存 (being) の居場所よりも、自らが居場所を創出 (doing) していることが分かった。これまで外国人児童生徒の居場所問題は、すでに用意された学級や日本語教室、国や地域という場所に限定して議論されてきた。萩原は、子どもや若者の経験と居場所について、「私」が何者であるかを定義するとき、一人一人の経験が「私」という意味を作り出すと指摘する。経験は、価値（かけがえのなさ）の生成につながるので、誰とも交換できないかけがえのない「私」を生み出す（萩原、2011）。

マージナルな存在である移民第二世代の若者たちの経験もまた、かれらだけが創出できるかけがえのないものである。その可能性を発揮できる場、それを一緒に探す支援システムこそが、本来必要だと考えられる。

今後の課題としては、本稿執筆中に外国人

高校生に対して決定された施策が挙げられる。2020 年 11 月末に文部科学省は、外国人高校生への「取り出し指導」を、早くても 2023 年度から正式な単位として認める方針を示した（『日本経済新聞』、2020.11.26 朝刊）。島根県のある町の県立高校は、2021 年度から日本語指導が必要な外国人に対し、日本語や日本文化を学ぶ科目を設立する（『山陰中央新報』、2020.10.9 朝刊）。これらが、外国人生徒の居場所とどう関係するかについては、今後の追調査が必要である。

また本研究では、インタビュー事例数もさることながら、外国人高校生を対象としたため、他世代の外国人の居場所については網羅されていない。しかし、国や地域を架橋し来日している外国人たちは、マージナル・マンとしての可能性を秘めている。より幅広く外国人の居場所について明らかにする必要がある。

※本研究は JSPS 科学研究費（19K02076）の助成を受けたものです。

注

（1）本稿で用いる都市名、学校名を表すアルファベット、聴き取り対象者、その家族は、実名ではなく、また実際の名称のイニシャルではないことを記しておく

（2）中藤は、個人が何かすることに優先して、まず「いること being」への保障が重要だと Winicot(1987) を引用し述べている。それに加えて、北山 (2003) が居場所の提供は、「存在の連続性 continuity of being」あるいは「いること」が幼児に保障され、自己統合、自己確立の基盤となることにも触れ、「いること being」の重要性を述べている（中藤、2011）。

参考文献

阿部真大，2011,『居場所の社会学――教育生きづらさを超えて』．日本経済新聞出版社．

CINGA 地域日本語実践研究会編，2018,『多文化共生の地域日本語教室をめざして―居場所づくりと参加型学習教材』．松柏社.

Elliott, A. and Urry, J.，2010，*Mobile Lives*（遠藤英樹監訳，2016,『モバイル・ライブズ――「移動」が社会を変える』．ミネルヴァ書房）.

Erikson, E.H.，1959，*Psychological Issues Identity and the Life Cycle*（小此木啓吾訳，1973,『「自我同一性」アイデンティティとライフサイクル』．誠信書房）.

外務省，2019,「特定技能の創設」．（最終閲覧 2020 年 9 月 4 日．https://www.mofa.go.jp/mofaj/ca/fna/ssw/jp/index.html）

石﨑直一・依光正哲，2003,「日本に在住する外国人労働者第二世代の進路選択の研究―2002 年度調査より―」,『一橋大学経済研究所世代間問題研究機構　ディスカッションペーパー』，No.166，1－24.（最終閲覧 2020 年 9 月 17 日，http://cis.ier.hit-u.ac.jp/Common/pdf/dp/2003/dp166.pdf）

出雲市，2020,「令和元年度島根県外国人住民実態調査等報告書（出雲市分）」．（最終閲覧 2020 年 12 月 5 日，https://www.city.izumo.shimane.jp/www/contents/1597899173930/files/jittaichosa.pdf）

出雲市，2019,「出雲市における日本語指導について」．（最終閲覧 2020 年 5 月 23 日，http://www.city.izumo.shimane.jp/

www/contents/1525744639164/index.html)

出雲市，2016,「出雲市多文化共生推進プラン」.（最終閲覧 2020 年 5 月 15 日，http://www.city.izumo.shimane.jp/www/contents/1467621853264/files/tabunka_all.pdf)

金谷千彗子 , 1990,『世界の家族――女性の居場所はやっぱり家庭なのか』. 芸林書房 .

三浦綾希子，2020,「高等教育で学ぶ移民第二世代の若者たち」,『現代思想』，48 巻 6 号，195 － 203.

宮澤理恵，2020,「外国人児童生徒の居場所とは何か―あるブータン出身の高校生の場合―」，島根大学法文学部紀要社会文化学科編『社会文化論集』，16 号，71 － 80.

文部科学省，2019,「外国人児童生徒受入れの手引」.（最終閲覧 2019 年 11 月 14 日，http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/04/22/1304738_001.pdf)

文部科学省，2008,「外国人児童生徒教育の充実方策について（報告）」.（最終閲覧 2019 年 12 月 19 日，https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/042/houkoku/08070301/006.htm)

文部科学省初等中等教育局国際教育課，2018,「平成 30 年度　都道府県・市区町村等日本語教育担当者研修　外国人児童生徒等教育の現状と課題」.（最終閲覧 2020 年 6 月 9 日，https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/todofuken_kenshu/h30_hokoku/pdf/r1408310_04.pdf)

中藤信哉，2011,「青年期における居場所についての研究」,『京都大学大学院教育学研究科紀要』. 57 巻，153 － 165.

中島喜代子･廣出円･小長井明美，2007,「「居場所」概念の検討」,『三重大学教育学部研究紀要』. 58 巻，77 － 97.

内閣府，2017,『平成 29 年版　子供・若者白書』. 日経印刷株式会社，2 － 17.

Park, R. E., 1928, “Human Migration and the Marginal Man,” *American Journal of Sociology*, 33(6), 881 － 893, (町村敬志・好井裕明編訳，1986,「人間の移住とマージナル・マン」,『実験室としての都市　パーク社会学論文選』，御茶の水書房，91 － 112).

佐野豪 , 2003,『高齢者の居場所創り――生かされ活きる老人ホームライフ』（ニューライフ選書 No.9）. 不昧堂出版 .

島根県環境生活部文化国際課，2020,「令和元年度島根県在住外国人住民実態調査報告書」.（最終閲覧 2021 年 1 月 5 日，https://www.pref.shimane.lg.jp/life/international/kouryu/kokusai/data/jitaichousa_h17.data/houkoku_R1.pdf)

島根県環境生活部文化国際課，2019,「島根県の外国人住民人口 2019 年（令和元年 12 月末現在）」.（最終閲覧 2020 年 5 月 23 日，https://www.pref.shimane.lg.jp/life/international/kouryu/kokusai/data/gaikokuzinzyuminzinkou2019.html)

島根県環境生活部文化国際課，2012,「平成 23 年度島根県在住外国人実態調査報告書」.（最終閲覧 2021 年 1 月 5 日，https://www.pref.shimane.lg.jp/life/international/kouryu/kokusai/data/jitaichousa_h17.data/houkoku23.pdf)

Simmel, Georg., 1908, “Exkurs über den Fremden,” *Soziologie: Untersuchungen über die Formen der. Vergesellschaftung*, Duncker & Humblot, 509 − 512, (鈴木正訳, 1999,「よそ者についての補論」,『ジンメル・コレクション』. 筑摩書房, 248 − 259).

Stonequist, Everett. V., 1937, The Marginal Man: *A Study in Personality and Culture Conflict*, Charles Scribner’s Son.

田中智雄, 1992,「登校拒否 (不登校) 問題について―児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して―（学校不適応対策調査研究協力者会議報告)」,『教育委員会月報』. 44 巻, 25 − 29.

徳田剛, 2020,『よそ者 / ストレンジャーの社会学』. 晃洋書房 .

上野千鶴子編, 2015,『脱アイデンティティ』. 勁草書房.

Urry, John. , 2007, *Mobilities*（吉原直樹・伊藤嘉高訳, 2015,『モビリティーズ――移動の社会学』. 作品社）.

矢野泉, 2006,「アジア系マイノリティの子ども・若者の居場所づくり」,『横浜国立大学教育人間科学部紀要. Ⅰ, 教育科学』. 8 巻, 261 − 273.